

戦争と道義

- 日和見主義で国を救えるか -

盛田 常夫

アメリカの対イラク攻撃は、「9.11 テロ」にたいする「仕返し」として、すでに1年以上前に決められた既定のシナリオである。しかし、早期の単独攻撃をためらったのは、攻撃の正当性が欠如していたからである。アルカイダとの関係が具体的に確証されなければ、即時の攻撃は道義性をもたない。その確証がないので、大量破壊兵器の廃棄の約束違反に正当性を求めている。この約束は国連の決議によるものだから、今度はその違反を証明するために、国連の査察再開という面倒な手続きをとる必要が出てきた。

ベオグラード爆撃のような都市中枢部破壊によって「成果」を挙げたアメリカにしてみれば、同じようにバグダッドを攻撃すれば、フセイン政権を崩壊させることができると読んだ。しかし、いくらなんでも、確証もないのに、都市への爆撃が許されるわけがない。しかも、イラクにはすでに核兵器の製造能力がないことを、アメリカは良く分かっている。生物・化学兵器は残っている可能性は大きい、オウム真理教ですらサリンが製造できるし、アメリカの「たんそ菌」はアメリカで製造されているものが使われている。イラクが製造していなくても、生物・化学兵器の使用は可能な時代だ。だから、それだけの理由で大量の人的犠牲（死者や難民）が出る攻撃が正当化されるとは思えない。

時間が経過するにしたがい、アメリカの軍事攻撃に反対する国際世論が大きくなってしまった。明らかに、これはアメリカの誤算である。自らも確信のもてない攻撃に、国際世論が道義性を見出せないのは当然ではないか。ブレア首相の主張は、次第に専制政権に苦しむ国民の解放に力点が移っている。専制政権なら世界中に山ほどあるのに、どうして今、イラクなのかその論拠も欠如している。

アメリカが単独で攻撃するにせよ、それを諦めるにせよ、すでに現時点での対イラク軍事攻撃にたいするアメリカの道義性は失われている。

イラク攻撃に固執する理由

それにしても、アメリカがそれほどまでにイラクへの軍事攻撃に執着するのはどうしてだろう。膨大な戦費をつぎ込むわけだから、当然の見返りが前提されている。戦国時代であろうと、現代であろうと変わらない。利権は現代の方が比較にならないほど大きい。

アメリカが攻撃をためらううちに、人々の疑念が大きく膨らみ、やがてそれが石油権益に結びついているのだろうと、誰もが考えるようになった。対イラク攻撃でロシアがアメリカとの関係維持に腐心しているのは、まさにこの点に他ならない。原油埋蔵量世界2位のイラクの権益にどのようにありつけるのか、それともありつけないのか。ありつける見通しがなければ、アメリカを支持する意味はない。それが国際政治である。

対イラク戦争で儲かるのは、アメリカの軍需産業と石油メジャーだけ。世界のほとんどの人々は石油高騰の直撃を受ける。道義のない戦争を仕掛けることで、アメリカとその同盟国が「イスラエル化」しないという保証はない。世界をそのような不安定な状態に変える権利はアメリカにはないはずだ。反戦デモに加わった人々の共通の思いだろう。

8 カ国声明の矛盾

1月30日にいわゆるアメリカ支援の「8カ国声明」が発表された。EUの5カ国に加え、チェコ、ハンガリー、ポーランドの首脳が署名した文書で、孤立するアメリカへの同盟を謳ったものである。きわめて政治的な文書である。ちなみに、この文書に署名したEU国は、英国、イタリア、ポルトガル、スペイン、デンマークである。

どうして中欧3国に声がかかったのだろうか。EU5カ国では様にならないからである。5カ国ではEU少数派が明々白々になる。数を増やすために、声がかかった。しかし、中欧3カ国の首脳はいかなる思いで署名したのか。EU諸国の意見が分かれている時に、しかもEU加盟を控えているこれらの諸国が、いわばEUの少数派に加担するリスクをどのように考えているのだろうか。プレゼンスを示す絶好の機会だと錯覚したのだろうか。とにかく、この声明に署名することで、これら3国の首脳はEUより、NATOを優先してしまった。独仏が怒るのは当然だろう。「黙っていればかわいいものを」というシラク大統領の言葉は露骨だが、確かに沈黙を守って、EUとの連帯を大切にす道を選ぶべきだった。

この声明が発表されて、ハンガリーの野党はいきり立った。このような重要な案件に、何の相談もなかったとはけしからんと。しかしすぐに沈静化した。オルバンだって、首相の立場だったら署名するだろうというのが、国会議員の共通意見だったからである。情けない。それにたいするメジェシの回答もいただけない。英国大使が書面をもってきたので署名したという。平和的解決を願う立場から署名したのだと説明する始末である。レベルの高い話ではない。どこかの国のように、頭隠して尻隠さずというのも恥ずかしいが。

メジェシとオボチュニズム

ところで、メジェシ首相は署名文案をきちんと読んだのだろうか。もしそうだとしたら、メジェシ個人の人間としての誠実さを疑うし、読まずに署名したのなら軽率の誹りを免れない。宣言文はインターネットでも簡単に入手できるが、非常にお粗末な文章だ。いかにも急いで仕上げたことが明瞭だ。

「9月11日のテロは我々すべてに向けられたものだ。... アメリカの勇気と寛大さと公正さのお陰で、ヨーロッパは20世紀の二つの専制であるナチズムと共産主義から逃れることができた。... イラクの体制と大量破壊兵器は世界の安全にたいする明白な脅威である。... したがって、武装解除しなければならない。...」

アメリカの勇気が共産主義からの解放を実現した？誰がそのような寝物語を作文したのだろうか。逆に、その作文通りだとしたら、その旧体制を担っていたメジェシ首相は自

らの生き様をどう説明するのだろうか。旧体制でもアメリカや西欧のために闘っていたと言うのだろうか。常に陽のあたる道を歩んできたメジェシであるが、方便もいい加減にして欲しい。それとも、それが彼の生き方なのだろうか。強いものに媚を売る。強い(長い)ものには巻かれる。昔ソ連、今アメリカ。軍事は NATO (アメリカ)、経済は EU。そこには何の矛盾もない。しかし、世の中、こんな調子の良いことが許されるだろうか。

イラクの反体制派の訓練を容認しているだけでテロの危険があるのに、8カ国声明にまで署名し、今はトルコ支援の輸送にハンガリー国内の公共輸送網を自由に使えることまで了解した。「毒を食らわば皿までも」、か。いや、「始めは処女のごとく、終わりは脱兎のごとく」、か。

2003年2月